

まもなくスタート！

## 新企画連載「希望の明日へ 一個別具体の中のリアルな真実」

本年 2023 年 2 月 6 日以来、9 月 19 日までの 7 ヶ月半にわたって、里山研究庵 N o m a d ホームページに連載した「要諦再読」(全 31 回)では、いわば資本主義超克の“生命系の未来社会論”について、さまざまな角度から縷々、述べてきたところです。

その全体像を概括するならば、末尾に掲げる“概括とそのエッセンス”に尽きると言ってもいいのではないのでしょうか。

この“概括とそのエッセンス”を念頭に、もう一度「要諦再読」(全 31 回)を吟味しつつ、21 世紀“生命系の未来社会論”の真髓をしっかりとつかみ取り、次へとつなげていきたいものです。

混迷と閉塞の時代、希望の明日へ向かって、多くの方々の共通認識、そして共通の課題意識の上に立って、議論が進むことを切に願っています。

まもなく 11 月初旬から当ホームページで、新企画「希望の明日へ 一個別具体の中のリアルな真実」の連載をスタートします。

折しも「食料・農業・農村基本法」の改正案が取り沙汰されている今、わが国歴代政権の改革、なかんずく「農業」、「農山漁村」をめぐる政策が、如何に行き当たりばつたりのその場凌ぎで、理念なきいい加減なものであるかに、今更のように唾然とさせられます。

今回の新企画連載では、2001 年以来、琵琶湖畔鈴鹿山中にこの里山研究庵という拠点を定め、続けてきた調査・研究の原点に立ち返り、今から 15 年前に出版した拙著『菜園家族 21 一分かちあいの世界へ』(コモンズ、2008 年)を原典に、今一度、身近な個別・具体的な「地域」の実情を再確認していきたいと思います。

こうすることによって、その後 15 年間のわが国の恐るべき急激な変貌の姿が浮き彫りになるとともに、地域に芽生えつつあった再生へのささやかな可能性も、それを阻み、押し潰してきた本当の障害が何であったのか、そして何であるのかも、自ずから明らかになってくるのではないのでしょうか。

この新企画連載が、瀬戸際まで追い詰められた現状から“希望の明日へ”向かって、今、私たちに何が大切なのかをみなさんとともに考えていく糸口になればと願っています。

「要諦再読」(全 31 回)の“概括とそのエッセンス”は、これからはじまる新企画連載「希望の明日へ 一個別具体の中のリアルな真実」を読み進めていく上でも、あらためてしっかりおさえておきたいものです。

## 「要諦再読」(全31回)の“概括とそのエッセンス”

資本主義超克の“生命系の未来社会論”

——分断と対立から

高次再融合の自然社会へ——

大地に根ざした

素朴で精神性豊かな

民衆の生活世界の構築。

21世紀における

資本主義超克の

人間復活のレボリューション。

根なし草同然の賃金労働者と

生産手段との「再結合」による

抗市場免疫の「菜園家族」を基軸に展開する

民衆の生活世界の構築。

菜園家族レボリューション。

広大無窮の自然界を母胎に

自然界の生成・進化を貫く

「適応・調整」の原理(=「自己組織化」)<sup>※1</sup>に則して  
生成・進化を遂げてきた人間社会。

人類始原におけるヒトの脳髄の異常な発達を契機に

やがては「道具」の恐るべき飛躍的な発展に伴って

自然界と人間社会両者を貫く

生成・進化の普遍的原理から

しだいに乖離していく。

その行き着く先

それは、人間社会が大自然界のただ中にありながら

あたかも悪性の癌細胞の如く

増殖と転移を限りなく繰り返し

人間どもの飽くなき欲望の赴くままに

生命の惑星、地球を丸ごと

容赦なく蝕み尽くしていく

宿命的とも言うべき結末なのだ。

自然界と人間社会の生成・進化を律する

原理レベルでのこの乖離を抑制し

両者合一の普遍的原理に  
人間社会を限りなく再収斂させること。

この壮大な人類的課題に立ち向かう

「菜園家族」を基調とするC F P複合社会<sup>※2</sup>の  
長きにわたる展開過程。

それは、より高次の脱資本主義F P複合社会（自然循環型共生社会）を経て  
人類悲願の高次自然社会への道を展望する。<sup>※3</sup>

まさにこれこそが  
民衆の主体形成の確かな基盤創出にとって  
不可欠の全プロセスであり  
なかんづくその初動におけるC F P複合社会の生成過程は  
地域社会構造のさまざまなレベルにおける  
多重重層的アソシエーション<sup>※4</sup>創出と  
生き生きとした人間発揚の舞台でもあるのだ。

長きにわたるこの全プロセスのわが国における具現化である  
民衆主体の自律的“菜園家族レボリューション”こそが  
貧困と格差と戦争のない  
大地に根ざした  
素朴で精神性豊かな  
民衆の生活世界を築く。

時代の大転換期にあって  
未来に対する傲慢と不安が錯綜する  
混迷の今日においては尚のこと  
宿命を背負った人間社会への  
この新たな問いかけが  
抽象レベルでの概念操作を延々と繰り返し  
訓詁学的手法の隘路に陥りがちな現状を  
自ずから克服し  
現実世界に広がる豊かな具体的事実からの  
帰納を重視する  
実証的研究の復権を促す。

それはやがて  
18世紀イギリス産業革命の渦中から現れた  
19世紀未来社会論を止揚し  
新たな時代の要請に応えうる

高次の 21 世紀未来社会論の構築を  
可能にするのではないか。  
まさにそれこそが“生命系の未来社会論”なのである。

わが国の今日の腐り切った「政治」の現実  
民衆同士に殺し合いを強いる  
超大国間覇権抗争のウクライナ戦争  
折しも重なるかのように緊迫してきた中東情勢  
報復の連鎖の背後にうごめく  
超大国アメリカ巨大権力の影  
危機迫る世界戦争の本質も  
こうした 21 世紀“生命系の未来社会論”の  
新たな世界認識の構築と鍛錬によって  
より深く捉えることが可能になるのではないか。

そして、何よりも今日の混沌と閉塞の中から  
めざすべき 21 世紀の未来像が  
より鮮明に浮かび上がってくるであろう。

(「要諦再読—スタートにあたって—」をベースに改編)

※1 「要諦再読—その 15— 今こそ近代のパラダイムを転換する」<https://www.satoken-nomad.com/archives/2366>、  
および「要諦再読—その 28— 高次自然社会への道」<https://www.satoken-nomad.com/archives/2592> の 2 節「人類  
史を貫く『否定の否定』の弁証法」を参照のこと。

なかんずく「自己組織化」については、スチュアート・カウフマン 著、米沢登美子 監訳『自己組織化と進  
化の論理 —宇宙を貫く複雑系の法則—』(日本経済新聞社、1999 年)、原典 Kauffman, Stuart "AT HOME IN THE  
UNIVERSE : The Search for Laws of Self-Organization and Complexity", Oxford University Press, Inc., 1995 を参照。

※2 資本主義セクター C (Capitalism の C)、家族小経営セクター F (Family の F)、公共的セクター P (Public  
の P) の 3 つのセクターから成る「菜園家族」を基調とする複合社会。「要諦再読—その 17— 『菜園家族』社  
会構想の基礎」<https://www.satoken-nomad.com/archives/2387> を参照のこと。

※3 「要諦再読—その 28— 高次自然社会への道」<https://www.satoken-nomad.com/archives/2592> を参照のこと。

※4 「要諦再読—その 18— 草の根民主主義熟成の土壌」<https://www.satoken-nomad.com/archives/2406> の 1 節「地  
域協同組織体『なりわいとも』の生成・展開」、および「要諦再読—その 19— 『匠商家族』と地方中核都市の  
形成」<https://www.satoken-nomad.com/archives/2419> を参照のこと。

◆連載「要諦再読」(全 31 回)の《目次一覧》は、下記リンクのページをご覧ください。

<https://www.satoken-nomad.com/archives/2636>



☆新企画「希望の明日へ 一個別具体の中のリアルな真実」は、11月初旬から連載をはじめます。引き続きお読みいただき、ともに考えていければと願っています。

2023年10月17日  
里山研究庵N o m a d  
小貫雅男・伊藤恵子

〒522-0321 滋賀県犬上郡多賀町大君ヶ畑（おじがはた）452番地

里山研究庵N o m a d

TEL&FAX : 0749-47-1920

E-mail : onuki@satoken-nomad.com

里山研究庵N o m a d ホームページ

<https://www.satoken-nomad.com/>

菜園家族じねんネットワーク日本列島 Facebook ページ

<https://www.facebook.com/saienkazoku.jinen.network/>